

3. 哺乳類

選定・評価方法の概要

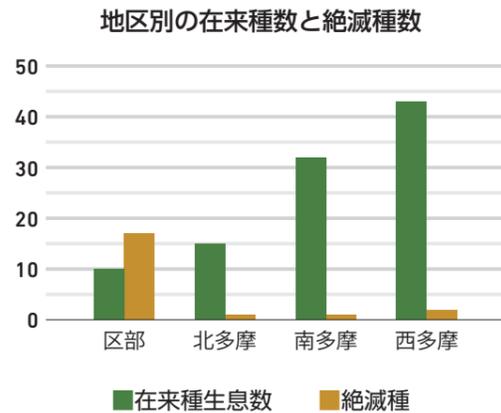
検討対象種は、東京都において明治時代以降に生息記録がある在来の陸生哺乳類46種のうち、地域によって絶滅したか絶滅のおそれのある可能性があるもので、今回の検討対象種は、前回（本土部レッドリスト2010）の40種に3種を加え、合計43種とした。新たに加わった3種は、前回以降に生息が確認されたシナノホオヒゲコウモリ、今回の現地調査で確認されたクビワコウモリとカグヤコウモリである。検討対象から除外したのは、いずれの絶滅危惧カテゴリーにも該当しないと考えられたアブラコウモリ、タヌキ、ニホンジカの3種である。

絶滅のおそれの評価は、基本的に定量的要件を用いた。ただし、IUCN(2003)による「地域レベルでレッドリスト基準を適用する場合のガイドライン」(Guidelines for Application of IUCN Red List Criteria at Regional Levels, Version3.0)を参考にして、ある地域の生息状況が絶滅危惧カテゴリーの数値基準に当てはまる場合でも、その地域で増加している、隣接地域に普通に生息するなどの種については、ランクを1ないし2段階下げて評価した。また、本土部全体としての評価は基本的に、4地域のなかで絶滅のおそれが最も低いランクで代表させることとした。なお、本解説版(本土部レッドデータブック2023)の作成時に本土部レッドリスト2020におけるニホンカモシカとニホンジネズミのカテゴリーの見直しを行った。

選定・評価結果の概要

評価の結果、いずれかの地域において絶滅またはそのおそれがある種(絶滅(EX)、絶滅危惧I A類(CR)、絶滅危惧I B類(EN)、絶滅危惧II類(VU)、情報不足(DD))のいずれかに該当する種)として34種、準絶滅危惧(NT)を含めると40種が選定された。このほかに留意種としてのみ選定されたものが2種(アズマモグラ、アカネズミ)、いずれのカテゴリーにも該当しなかった種がスミスネズミ1種であった。なお、近年(概ね2001年以降)の生息情報がある在来種(以下、現生種とする)の数は、地域別にみると西多摩(43)、南多摩(32)、北多摩(15)、区部(10)の順に多い(カッコ内は種数)。

区部では現生の10種に対して絶滅が17種ときわめて多く、かつては低地においても豊かな自然が存在したことが示されている。過去の生息情報は岸田(1934)による昭和初期の調査記録に基づいている(ただし区部におけるシントウトガリネズミの記録は、金子(2012)の見解に従い、誤りと判断した)。北多摩については情報が乏しく、現生の15種に対して、生息の可能性はあるが「データ無し」となった種が15種と多い。南多摩は高地性の種を欠くものの多くの種が生息するが、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)まで含めると現生の32種中18種(56.3%)が何らかのカテゴリーに該当している。西多摩は関東山地にみられるほぼすべての哺乳類が確認されている一方で、絶滅危惧種(EN、VU)が12種(現生43種の27.9%)、準絶滅危惧(NT)が11種(同25.6%)、合計で23種(同53.5%)あり、東京都の生物多様性の保全を図る上で重要な地域であることが示されている。なお、高地性のミズラモグラ、ヤチネズミなどは、高標高地の小面積でしか確認されていないが、隣接県に広く分布することを考慮して、直ちに絶滅のおそれが高いとは評価せず、準絶滅危惧(NT)と評価した。なお、北多摩のニホンリスとヒナコウモリはこの地域での生息確認記録はないが、狭山丘陵の埼玉県側に記録があ



ヤチネズミなど生息する林床(奥多摩町)

© 田畑伊織

り、東京都側にも生息する可能性が高いことから、データ無し(一)ではなくDDと評価した。

留意種としては区部のアズマモグラとアカネズミ、西多摩のハタネズミが選定された。区部の2種はこの地域にみられる数少ない野生哺乳類であり、現在のところ絶滅のおそれが高いとは言えないが、開発の進行とともに気づかぬうちに広範囲から消失する可能性があり、比較的良好な環境が保たれていることを指標する種としても注目される。杉並区(2013)による調査では、同区内におけるアズマモグラの分布域縮小が指摘されている。西多摩のハタネズミは、この地域に大規模な河川敷など本種の選好する特殊な環境が少なく、今後の動向に注意が必要であることから、留意種に選定した。

前回(本土部レッドリスト2010)の評価結果と比較すると、ランクが上がったのは南多摩のニホンザル、ニホンリス、西多摩のヤマコウモリ、ニホンウサギコウモリ、テングコウモリなどで、ニホンリスやヤマコウモリのように丘陵地での開発進行や巨木の伐採などが原因で明確な生息状況の悪化がみられたもののほか、コウモリ類など、情報が増加したことから前回より厳密な評価が可能となったものもある。ランクが下がったのは、南多摩と西多摩のツキノワグマで、これは分布域拡大がみられていることと隣接県に広く生息することによる。個体数増加も推測されるが、今後の検証が必要である。

このほか、区部のカヤネズミ、南多摩のコキクガシラコウモリ、ヤマコウモリ、モモジロコウモリなど、前は絶滅(EX)、情報不足(DD)、データ無し(一)と評価された種の中で、新しく情報が得られたことから実態を示すカテゴリーに変更されたものがある。分布域の拡大がみられる北多摩のイノシシも同様である。

前回以降、特にコウモリ類について新しい情報が蓄積され、前回より正確な評価を行うことができたと考えられる。しかし、ニホンジカなど一部の種を除いて、都内における哺乳類の生息現況に関する情報は全般にきわめて乏しく、それは今回の現地調査によってコウモリ類2種が都内で新たに確認されたことにも示されている。今後、より正確な評価に向けて、生息状況に関する基礎的、網羅的な調査を行うことが必要である。

絶滅のおそれを高めている要因としては、開発や森林伐採、天然林の人工林化、人工林の管理不足などに伴う生息環境の消失、劣化、断片化、単純化がまず挙げられる。特に南多摩の丘陵地には、東西方向に帯状に走る複数の緑地が残され、野生哺乳類の生息地や東西を繋ぐ回廊としての機能を果たしているが、開発による分断の影響を大きく受けており、保全上の配慮が必要である。また、西多摩、南多摩におけるニホンジカの個体数増加、分布拡大に伴う林床植生の改変や消失なども要因として指摘されている。そのほか、狭山丘陵ではキタリス、町田市、瑞穂町、あきるの市ではクリハラリスの、いずれも特定外来生物に指定されている外来種が確認されており、ニホンリスへの影響が懸念されている。しかし、これらの要因がもたらす影響の詳細については不明なことが多く、調査を行い、必要な対策を検討することも重要な課題である。

(石井 信夫)

引用文献

- 金子之史, 2012. 東京都23区における絶滅陸棲哺乳類—岸田久吉(1934)の検討を中心に—. 香川生物, 39: 19-35.
- 岸田久吉, 1934. 大東京の哺乳動物に就て. Lanzaia, 6 (52): 17-30.
- 杉並区, 2015. 杉並区自然環境調査報告書(第6次).

写真提供者

田畑伊織、(有)ゼフィルス



カヤネズミが確認された河川敷(板橋区)(球栗は都外)

ニホンザル

Macaca fuscata

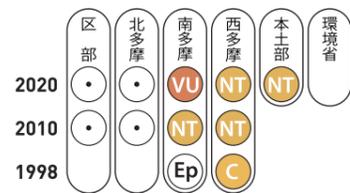
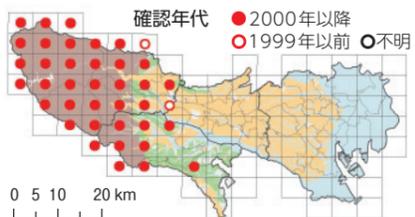
霊長目
オナガザル科

■種の特性と生息状況：頭胴長は雌成体35～45cm、雄成体40～55cm、平均体重は雌成体9kg、雄成体12kgで雄の方が大きい。常緑・落葉広葉樹の二次林が好適な生息環境である。雌雄の成体と子供からなる数十頭前後の群れで遊動生活をする。植物食傾向の強い雑食性で、果実、種子、葉、芽、花のほか、キノコ、昆虫類なども食べる。日本の固有種で、本州、四国、九州および小豆島、屋久島などに分布する。

■生存を脅かす要因：広葉樹林の針葉樹植林化、各種開発による広葉樹林消失などの影響を受けている。都内の個体数は500～700頭でほぼ安定しているが、農作物被害対策として年当たり50頭ほどの駆除が行われている。

■特記事項：都内では、南多摩、西多摩に分布する。とくに南多摩では、個体数が百数十頭と少ない一方で駆除数が多いので、存続に配慮した管理が必要である。

執筆 石井信夫
文献一覧 9, 74



2011年

ニホンリス

Sciurus lis

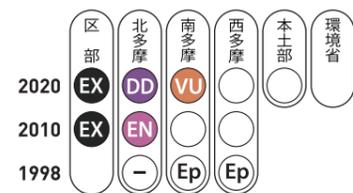
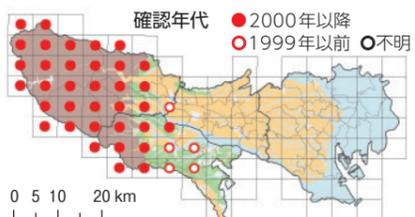
齧歯目
リス科

■種の特性と生息状況：頭胴長16～22cm、尾長13～17cm、体重250～300g。本州、四国に分布する。夏毛では耳介の房毛がなくなり、体色も赤褐色となる。主要な餌はマツ類やオニグルミの種子である。区部に戦前の記録があるがすでに絶滅した。北多摩ではこれまで分布不明であったが、近年狭山丘陵で確認された。南多摩の丘陵地では樹林の分断・孤立化により、西側の連続山林を除いてほぼ絶滅してしまっている。南多摩・西多摩の山地帯も植林地が多く、必ずしも好適な生息環境ではなくなっている。

■生存を脅かす要因：森林伐採、河川開発、観光開発、市街地開発、道路建設、交通事故、不適切な環境管理、外来種との競争（競合）、外来種による交雑、局所分布（狭山丘陵）、松枯れの進行やオニグルミの減少。

■特記事項：北多摩では狭山丘陵に本種と近縁な外来種キタリスが野生化しており交雑が懸念される。外来種クリハラリスは西多摩で小個体群が定着し、南多摩では飼育施設からの逸出や神奈川県側から侵入してくる可能性がある。本種と資源をめぐる競合や感染症の伝播が懸念されるため、飼育施設での管理の徹底や侵入個体の確実な根絶が求められる。

執筆 重昆達也・田村典子
文献一覧 32, 39, 50, 62, 68, 69, 70, 71, 80, 125



夏毛 冬毛
榎原村 2004年

ニホンモモンガ

Pteromys momonga

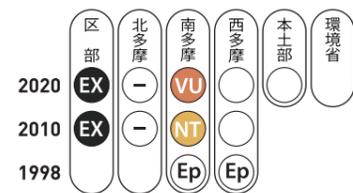
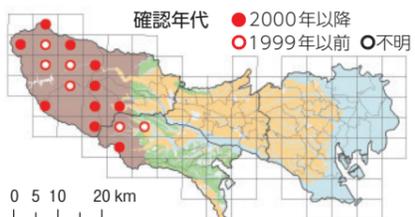
齧歯目
リス科

■種の特性と生息状況：頭胴長13～20cm、尾長9.5～14cm、体重150～220gでムササビの約1/10に過ぎない。本州、四国、九州に分布する。樹洞をねぐらとし、移動時に木から木へ滑空することで知られる。樹木の芽、果実、種子などを食べる。区部に戦前の記録があるがすでに絶滅した。現在の都内では南多摩・西多摩の低山帯から亜高山帯に分布しているが、夜行性なこともあり、生息情報は断片的で正確な分布は把握されていない。

■生存を脅かす要因：森林伐採、観光開発等、市街地開発、道路建設、不適切な環境管理、温暖化や異常気象災害。主に大径木の樹洞をねぐらとするので、樹洞の多い森林環境の保全が必要である。山麓部では社寺林の老齢化による倒木や伐採によりこうしたねぐらが失われることが多い。

■特記事項：南多摩では、かつて山麓部の複数箇所からの記録が知られていたが、この10年間で確実な記録が1カ所にまでに減少してしまったことから絶滅危惧Ⅱ類（VU）と評価した。南多摩・西多摩とも、情報の蓄積に努めるとともに、社寺林等を含む森林伐採に留意することが必要である。

執筆 重昆達也
文献一覧 2, 4, 5, 20, 25, 28, 41, 43, 47, 50, 62, 65, 73, 75, 118



榎原村 2016年

ムササビ

Petaurista leucogenys

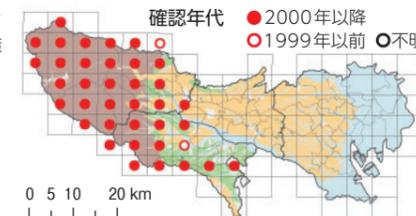
齧歯目
リス科

■種の特性と生息状況：頭胴長27～49cm、尾長28～41cm、体重495～1250g。本州、四国、九州に分布する。主に樹洞をねぐらとし、移動時に木から木へ滑空することで知られる。樹木の葉、芽、果実、種子などを食べる。区部に戦前の記録があるがすでに絶滅した。北多摩では過去に狭山丘陵に分布するという報告があるが現状は不明である。南多摩では高尾山など比較的安定した生息地もあるが、丘陵地ではすでに絶滅した地域があり、現在もなお生息する丘陵地についても樹林の分断・孤立化により分布域の前線が後退しつつある。南多摩・西多摩の山地帯には広く分布するが、植林地や若い雑木林は必ずしも好適な生息環境ではなく、大径木の多い山麓の社寺林などで見られることが多い。

■生存を脅かす要因：森林伐採、観光開発等、市街地開発、道路建設、交通事故、過剰利用、不適切な環境管理、温暖化や異常気象災害、局所分布（多摩丘陵）、近親交配（多摩丘陵）、外来種との競争（競合）（南多摩）。完全な樹上生活者なので、樹林の連続性が失われることが脅威となる。また、社寺林の老齢化、里山管理、異常気象の影響などで樹洞を持った大径木が失われることも脅威である。南多摩では神奈川県側から侵入してくる可能性のある外来種クリハラリスとの樹洞をめぐる競合が懸念される。

■特記事項：狭山丘陵では東京都レッドリスト2020の現地調査で巣箱調査を実施したが確認できなかった。多摩丘陵の個体群はすでに孤立個体群となっており、残存する個体数も非常に少ないと推定されている。南多摩全体での本種の評価は準絶滅危惧（NT）だが、多摩丘陵の孤立個体群に限ればその脆弱性はさらに高いランクに匹敵する。生息地の樹林をこれ以上分断しないこと、樹洞や採餌場所を有する現在の生息環境の質を維持するのはもちろんのこと、さらに積極的な保全策を講じれば個体群を維持できない可能性がある。

執筆 重昆達也
協力 岡崎弘幸・繁田真由美
文献一覧 7, 17, 26, 27, 29, 30, 32, 50, 63, 73, 93, 99, 117



八王子市 2006年

ヤマネ

Glirulus japonicus

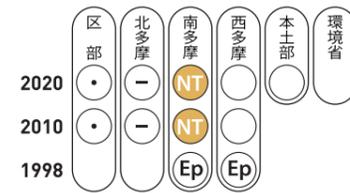
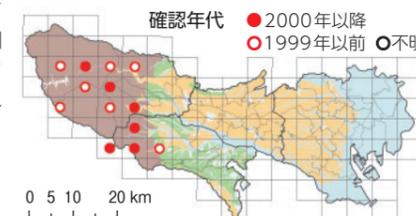
齧歯目
ヤマネ科

■種の特性と生息状況：頭胴長68～84mm、尾長44～54mm。体重は14～20gであるが、冬眠時には2倍ほどに増える。尾には長い毛が生え、背中に黒い縦線がある。東日本の個体は西日本の個体より毛色が淡い。落葉広葉樹林を主体とした低地から亜高山帯までの自然度の高い森林に生息する。細い枝を走り回るのに適した形態の四肢を持っている。主に昆虫類を餌とするが、果実、種子、木の芽、鳥類の卵なども食べる。本州、四国、九州に生息。都内では確認例は多くないが山地、特に落葉広葉樹林帯には広く分布しているようである。

■生存を脅かす要因：天然記念物に指定されているが、現時点で、生存の脅威となる要因は明らかではなく、保全目的の保護地域等は設定されていない。成熟した落葉広葉樹林で構成される良好な山地環境を保全することが望まれる。

■特記事項：

執筆 岩佐真宏 文献一覧 1, 78, 116



ヤチネズミ

Craseomys andersoni

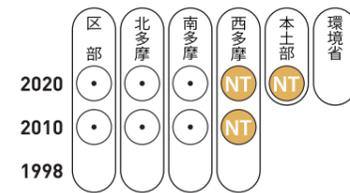
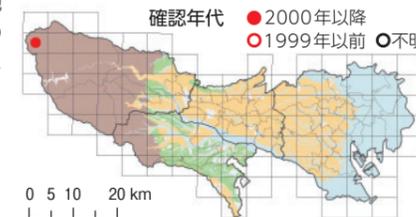
齧歯目
キヌゲネズミ科

■種の特性と生息状況：頭胴長79～118mm、尾長40～63mm。体重11～40g。頭部から背面は褐色で、腹面は淡灰色。耳は小さく、尾は短い。体サイズや毛色には地理的変異が多い。主に高標高の湿潤な岩塊地に生息し、近縁なスミスネズミとの競合では垂直分布の棲み分けが認められる。草食性で、時に造林地の幼木樹皮を食害することがある。本州に生息。都内では西多摩の標高1,000m以上の樹林地に生息する。

■生存を脅かす要因：高標高地の湿潤な岩塊地を好むので、二ホンジカの食害による林床の荒廃とそれに起因する土砂流出などが脅威になると考えられる。

■特記事項：

執筆 岩佐真宏
文献一覧 53, 67, 116



東京都外

ハタネズミ

Alexandromys montebelli

齧歯目
キヌゲネズミ科

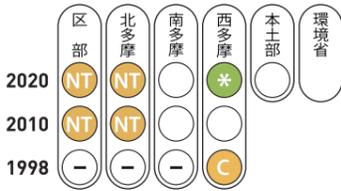
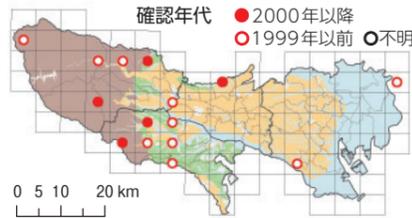
■ **種の特性と生息状況**：頭胴長95～136mm、尾長29～50mm。体重22～62g。頭部から背面は黄褐色で、腹面は灰色。耳は小さく、尾は短い。草原や畑、山林のササ原などに生息する。主にイネ科やキク科を中心とした草本類を餌とする。本州、九州に生息。都内では多摩川などの河川敷に生息しており、西多摩の高標高地の1,400～1,700mのスズタケの生える樹林や南多摩の山地などでも少数が捕獲されている。

■ **生存を脅かす要因**：草地が主な生息地のため、市街化に伴う生息地の減少が脅威となり、近年減少傾向にある。なお稀に個体数の異常増加に伴い、山地の樹林や果樹園、農地で食害を及ぼすことがある。

■ **特記事項**：

執筆者 岩佐真宏

文献一覧 16, 67, 116



© 岩佐真宏

東京都外

ヒメネズミ

Apodemus argenteus

齧歯目
ネズミ科

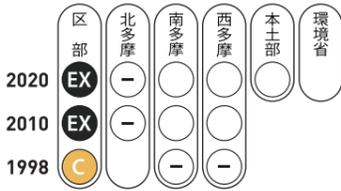
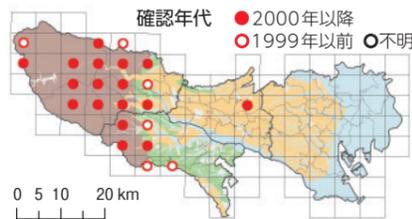
■ **種の特性と生息状況**：頭胴長65～100mm、尾長70～110mm。体重10～20g。アカネズミに似るが小さく、頭部から背面は栗色で、腹面は灰白色から象牙色。尾が長く頭胴長を超える。落葉広葉樹を主体とした森林や針葉樹植林に生息する。主に植物の種子や根茎などを餌とするが、夏の繁殖期には昆虫類を主食とする。北海道、本州、四国、九州に生息。都内では南多摩や西多摩の落葉広葉樹林や針葉樹植林に生息する。

■ **生存を脅かす要因**：区部に戦前の記録があるが、すでに絶滅したと考えられる。

■ **特記事項**：

執筆者 岩佐真宏

文献一覧 56, 67, 116



© 岩佐真宏

東京都外

アカネズミ

Apodemus speciosus

齧歯目
ネズミ科

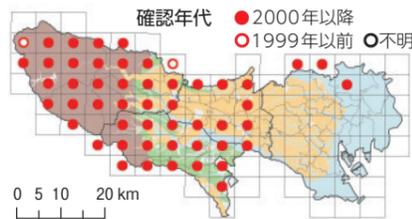
■ **種の特性と生息状況**：頭胴長80～140mm、尾長70～130mm。体重20～60g。頭部から背面は茶色で腹面は通常白色。尾は長い。頭胴長と同等またはそれ以下が多い。森林から農地、荒地など、幅広い環境に生息する。主に植物の種子や根茎などを餌とするが、昆虫類を食べることもある。北海道、本州、四国、九州に生息。都内では低山地の樹林から高山まで生息域が広い。

■ **生存を脅かす要因**：低山地から高山まで普通に生息するが、他地域との交流が少ない孤立個体群では今後の生息の推移に留意する必要がある。

■ **特記事項**：

執筆者 岩佐真宏

文献一覧 53, 94, 116



© 岩佐真宏

東京都外

カヤネズミ

Micromys minutus

齧歯目
ネズミ科

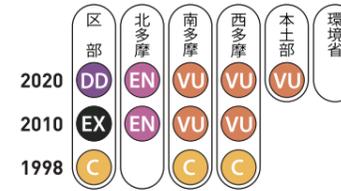
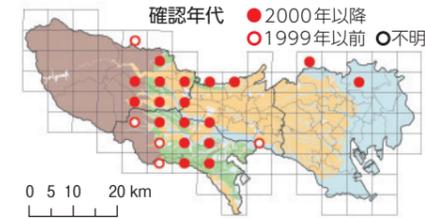
■ **種の特性と生息状況**：頭胴長55～77mm、尾長61～90mm。体重9～17g。背面は茶色で腰の部分はオレンジ色。尾は長く先端の上面は毛が無い。耕作地や草原、河川敷などの草原に生息し、ススキやオギなどの草の上に直径10cmほどの球巣を作り、その中で子を産み育てる。イネ科植物の種子や、バッタやイナゴなどの昆虫類を餌とする。本州、四国、九州に生息。都内では多摩川や荒川の河川敷や西多摩の里山などの草地に生息する。

■ **生存を脅かす要因**：耕作地や河川敷、里山にあるススキやオギなどの草原に生息するので、宅地開発などの影響を受けやすく、短期間で個体群が消滅する恐れがある。

■ **特記事項**：

執筆者 岩佐真宏

文献一覧 57, 79, 116



© 岩佐真宏

東京都外

ニホンノウサギ

Lepus brachyurus

兔形目
ウサギ科

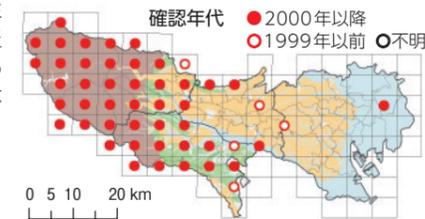
■ **種の特性と生息状況**：頭胴長50cm前後、体重2kgほどで、毛色は褐色系だが、東北地方や日本海側の積雪地帯では冬に白くなる。平地から亜高山帯の森林から草原まで様々な環境にみられるが、低山から山地の明るい環境を好む。植物食性で葉、芽、樹皮などを食べる。春から秋に数回繁殖し、1回2頭前後の早成性の仔を産む。日本の固有種で、本州、四国、九州、佐渡島、隠岐諸島などに分布する。

■ **生存を脅かす要因**：針葉樹植林が拡大した山地では、木の成長とともに本種が好む明るい環境が減少している。ニホンジカの採食による林床植生の衰退の影響もあると考えられる。平地では、本種が生息する緑地周辺が開発され、個体群の消滅をもたらす生息地の分断や孤立化が進んでいる。

■ **特記事項**：都内では西多摩、南多摩に広く生息するが、北多摩における生息情報は狭山丘陵にほぼ限られる。区部では荒川流域からわずかに情報が得られているが、生息状況は不明である。

執筆者 石井信夫

文献一覧 76, 119



© 浦野守雄

2006年

ニホンジネズミ

Crocidura dsinezumi

トガリネズミ形目
トガリネズミ科

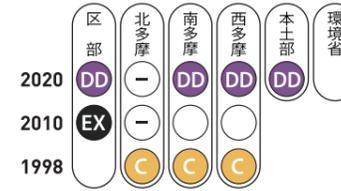
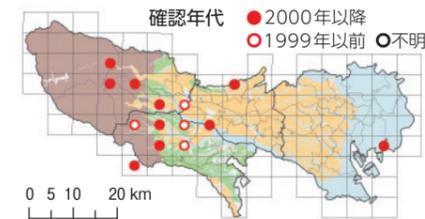
■ **種の特性と生息状況**：頭胴長61～84mm、尾長39～54mm。体重5～12.5g。吻部が細長く突出し、トガリネズミ類によく似るが歯の先端は白く、頭部から背面および腹面ともに全体的に茶灰色。尾の基部にまばらな荒毛が認められる。耕作地やその周辺にある草地に生息し、小型昆虫、クモ類や土壌動物を餌とする。北海道、本州、四国、九州に生息。都内では南多摩から奥多摩にかけての山地の樹林に隣接した耕作地周辺や河川敷などの草地に生息する。

■ **生存を脅かす要因**：区部に2000年代の記録があるが、生息状況は不明である。南多摩や西多摩では、広範囲から生息情報が得られているが、その実態は不明で、宅地開発や大規模な伐採、河川改修などの影響を受けている可能性がある。

■ **特記事項**：

執筆者 岩佐真宏

文献一覧 11, 50, 116



© 岩佐真宏

東京都外

カワネズミ

Chimarrogale platycephalus

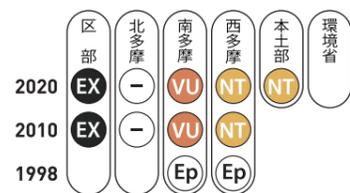
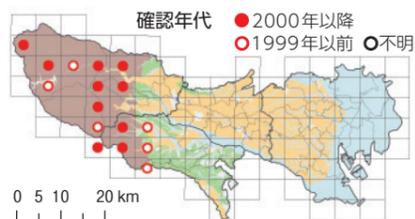
トガリネズミ形目
トガリネズミ科

■ **種の特性と生息状況**：頭胴長85～130mm、尾長85～118mm。体重30～50g。大型のトガリネズミ類で、頭部から背面は濃灰色、腹面は淡灰色、歯の先端は白い。尾は長く、指には水かきとなる剛毛が密生する。溪流に生息し、魚類や水生昆虫、カニ類、カエル類などを餌とする。本州、九州に生息。都内では南多摩から奥多摩一帯の山地溪流に広く生息する。

■ **生存を脅かす要因**：区部に戦前の記録があるが、すでに絶滅したと考えられる。山地の溪流に生息するので、河川改修や砂防工事、森林伐採に起因する土砂流出などで水質が悪化すると、生息できなくなる。

■ **特記事項**：

執筆者 岩佐真宏
文献一覧 8, 64, 116



© 岩佐真宏
東京都外

シントウトガリネズミ

Sorex shinto

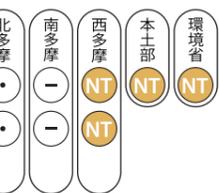
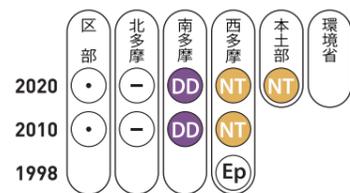
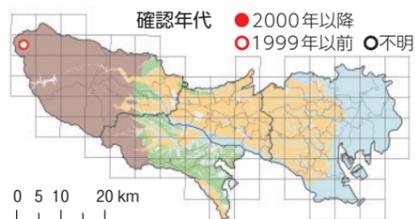
トガリネズミ形目
トガリネズミ科

■ **種の特性と生息状況**：頭胴長55～70mm、尾長45～52mm。体重4～10g。吻部が細長く突出し、歯の先端が赤褐色に染まる。頭部から背面および腹面ともに全体的に茶褐色。樹木の落葉や腐葉土が積もった地表で生活する。ガ類や甲虫類の幼虫、アリなどの昆虫類や、クモ類、ジムカデ類を食べる。本州、四国に生息。都内では標高1,000m以上の山地の900mくらいから山頂にかけて生息する。沢沿いの岩塊地でコケ類の繁茂した湿潤な場所に生息する。

■ **生存を脅かす要因**：標高1,000m以上の山地の樹林に少数が生息する。落葉が堆積したり、コケが繁茂する湿潤な環境を好むので、ニホンジカの食害による林床の荒廃とそれに起因する土砂流出、乾燥化が脅威になると考えられる。

■ **特記事項**：

執筆者 岩佐真宏
文献一覧 53, 67, 116



ミスラモグラ

Oreoscaptor mizura

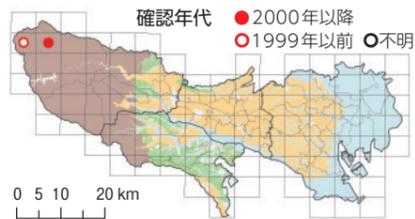
トガリネズミ形目
モグラ科

■ **種の特性と生息状況**：頭胴長77～107mm、尾長20～26mm。体重18～35g。小型のモグラ類で、頭部から背面および腹面ともに全体的に灰黒色。鼻部は先端が三角形で先端基部がわずかな稜状突起で縁取られ、吻部背面中央に溝がある。尾はアズマモグラより長いヒミズより短い。山地に生息し、小型昆虫、クモ類や土壌動物を食べる。本州に生息。都内では山地に生息すると考えられるが、西多摩の高標高（1,800m）の山道等での拾得例がわずかにあるのみである。

■ **生存を脅かす要因**：ブナ林が発達した山地に生息するが、個体数も少なく、その生態は不明な点が多い。

■ **特記事項**：捕獲の難しい種なので、山中でモグラ類の死体を発見した場合には、拾得して届けてもらう、撮影してもらうなど、生息調査の一助となるよう協力を仰ぐことも有益である。

執筆者 岩佐真宏
文献一覧 14, 116



© 岩佐真宏
東京都外

アズマモグラ

Mogera imaizumii

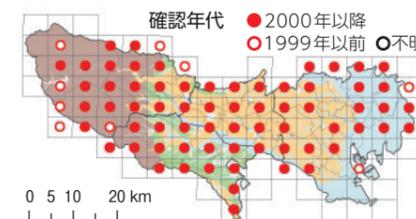
トガリネズミ形目
モグラ科

■ **種の特性と生息状況**：頭胴長120～160mm、尾長14～22mm、体重48～127g。頭部から背面および腹面ともに全体的に黒褐色で、坑道を掘る前掌はグローブ状になり、尾は短い。平地から山地の耕作地や草地、樹林などの地下の坑道に生息し、坑道内のミミズ類や昆虫類の幼虫などを餌とする。ヒルや冬眠中のカエル類、植物の種子なども食べることがある。本州、四国に生息。都内では都市部の公園、河川敷、耕作地周辺から山地の樹林などに生息する。

■ **生存を脅かす要因**：皇居や区部の公園など都市部の緑地にみられる。個体群は、他地域との交流がない孤立個体群なので、今後の生息の推移に留意する必要がある。

■ **特記事項**：

執筆者 岩佐真宏
文献一覧 15, 100, 116



ヒメヒミズ

Dymecodon pilirostris

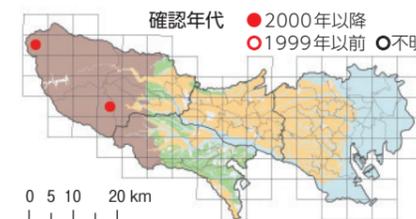
トガリネズミ形目
モグラ科

■ **種の特性と生息状況**：頭胴長70～84mm、尾長32～44mm、体重8～14.5g。最小のモグラ類で、吻部は細長く毛に覆われる。頭部から背面および腹面ともに全体的に黒色で、四肢は華奢で皮膚が鱗状で黒っぽく、毛が密生した太い尾はヒミズより長い。山地の樹林に生息し、小型昆虫、クモ類や土壌動物を食べる。本州、四国、九州に生息。都内では奥多摩の標高800m以上の山腹から山頂部の湿潤な岩塊地に生息する。

■ **生存を脅かす要因**：岩塊地の湿潤な環境を好むので、山地の樹林の伐採や、ニホンジカの食害による林床の荒廃とそれに起因する土砂流出、乾燥化が脅威になると考えられる。

■ **特記事項**：

執筆者 岩佐真宏
文献一覧 53, 67, 116



ヒミズ

Urotrichus talpoides

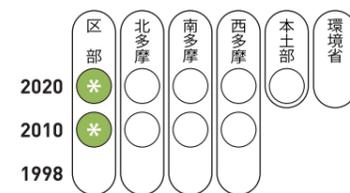
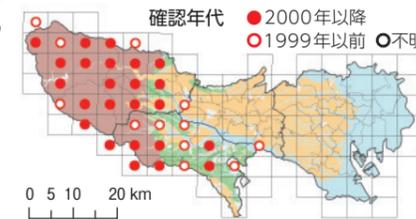
トガリネズミ形目
モグラ科

■ **種の特性と生息状況**：頭胴長89～104mm、尾長27～38mm、体重14.5～25.5g。小型のモグラ類で、吻部は細長く毛に覆われる。頭部から背面および腹面ともに全体的に黒色で、四肢は華奢で皮膚が鱗状だがヒメヒミズほど黒っぽくはなく、毛が密生した棍棒状の尾はヒメヒミズより短い。リター（落葉）層が堆積した丘陵地や低山地から山地にかけて生息し、小型昆虫、クモ類や土壌動物を食べる。本州、四国、九州、対馬に生息。都内では南多摩の山地から奥多摩にかけての樹林に生息する。北多摩については具体的な位置情報を伴った記録はないため、詳細については不明である。

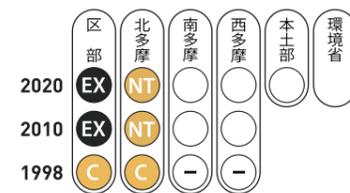
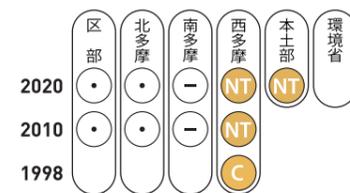
■ **生存を脅かす要因**：区部に記録があるが、すでに絶滅したと考えられる。南多摩や西多摩については、個体数も多いので、生存に対する脅威は今のところほとんどない。北多摩については、生息状況について情報収集することが望ましい。

■ **特記事項**：

執筆者 岩佐真宏
文献一覧 53, 67, 116



© 岩佐真宏
東京都外



© 岩佐真宏
東京都外

コキクガシラコウモリ

Rhinolophus cornutus

翼手目
キクガシラコウモリ科

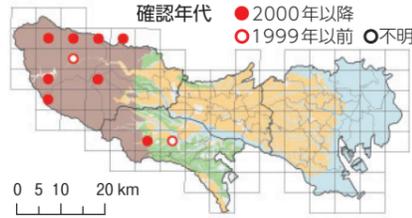
■ **種の特性と生息状況**：前腕長36～44mm、体重4～9g。北海道、本州、四国、九州やその周辺の島々に分布する。日本固有種。小型のコウモリで、吻には鼻葉がある。ねぐらは洞窟や隧道、廃屋などを利用する。都内では区部に戦前の記録があるが絶滅したと考えられる。北多摩では確実な記録がない。現在は南多摩と西多摩の山地帯にのみ分布しているが、冬眠洞は見ついているものの、出産哺育洞は見つかっていない。

■ **生存を脅かす要因**：各種開発、森林伐採、河川開発、石灰採掘、洞窟の消失や環境悪化、観光開発等、市街地開発、ダム建設、過剰利用、水質汚濁、シカの食害。観光鍾乳洞の廃業等による洞窟の閉塞や洞窟への人の立ち入りが悪影響を与えている可能性が考えられる。

■ **特記事項**：南多摩、西多摩とも少数個体が利用する冬眠洞は見つかっているが、出産哺育洞は見つかっていない。年間の活動サイクルの中でとりわけ重要な出産哺育洞や冬眠洞がどこにあるのかまだほとんど判っていない。出産哺育期と冬眠期の洞窟等への人の立ち入りに注意喚起することが望ましい。

執筆 重昆達也

文献一覧 2, 35, 38, 41, 42, 46, 50, 60, 90, 91, 120, 127



青梅市 2014年

キクガシラコウモリ

Rhinolophus ferrumequinum

翼手目
キクガシラコウモリ科

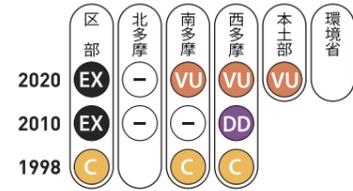
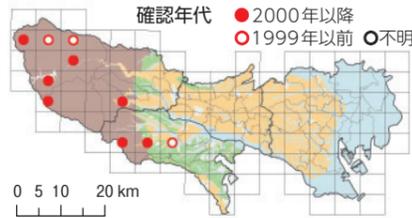
■ **種の特性と生息状況**：前腕長52～65mm、体重16～35g。北海道、本州、四国、九州やその周辺の島々に分布する。比較的大型のコウモリで、吻には鼻葉がある。ねぐらは洞窟や隧道、廃屋などを利用する。都内では区部に戦前の記録があるが絶滅したと考えられる。北多摩では確実な記録がない。現在は南多摩と西多摩の山地帯にのみ分布しているが、出産哺育洞は見つかっているのは西多摩だけである。

■ **生存を脅かす要因**：各種開発、森林伐採、河川開発、石灰採掘、洞窟の消失や環境悪化、観光開発等、市街地開発、ダム建設、過剰利用、水質汚濁、シカの食害。観光鍾乳洞の廃業等による洞窟の閉塞や洞窟への人の立ち入りが悪影響を与えている可能性が考えられる。

■ **特記事項**：神奈川県でも約50年ぶりに発見されるなど、都内でも人知れず激減してしまっている可能性があるコウモリである。出産哺育洞は西多摩でも1カ所しか確認されておらず、冬眠洞は見つかっていない。出産哺育期と冬眠期の洞窟等への人の立ち入りに注意喚起することが望ましい。

執筆 重昆達也

文献一覧 2, 35, 42, 46, 50, 51, 52, 59, 73, 90, 91, 123



あきる野市 2009年

クビワコウモリ

Eptesicus japonensis

翼手目
ヒナコウモリ科

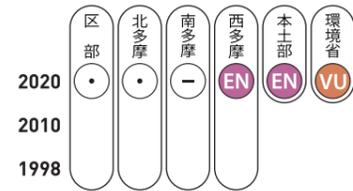
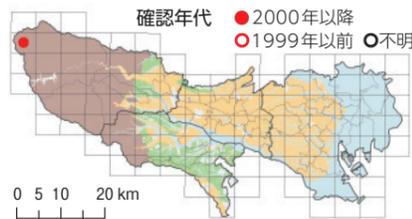
■ **種の特性と生息状況**：前腕長38～43mm、体重8～13g。東北地方南部から中部地方にかけての標高の高い山地帯に分布する。日本固有種。ねぐらは家屋の利用例も知られるが、通常は樹洞を利用してはと考えられる。都内では西多摩の亜高山帯からのみ見つかっているが、授乳期直後のメス成獣が捕獲されたことからこの地域で出産哺育を行っている可能性が高い。都内では見つかったばかりであり、詳しい生息状況は不明である。

■ **生存を脅かす要因**：森林伐採、シカの食害、局所分布。自然林の伐採はもとより、長期的なシカの食害による林相の変化も脅威となるだろう。また、生息環境となる亜高山帯要素を持った森林は都内では面積が狭く、局所分布となっている可能性が高い。

■ **特記事項**：都内では東京都レッドリスト2020の現地調査において、2019年8月に雲取山の標高1800～1900mのシラビソ帯で2個体が初めて捕獲された。西多摩・本土部で絶滅危惧IB類 (EN) と評価される以上、より正確な生息状況を把握するため、早急かつ継続した現況調査が必要である。

執筆 重昆達也

文献一覧 73, 88, 97, 103



奥多摩町 2019年

ヤマコウモリ

Nyctalus aviator

翼手目
ヒナコウモリ科

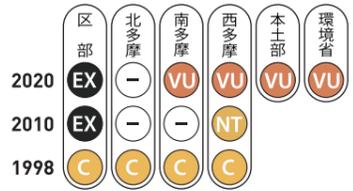
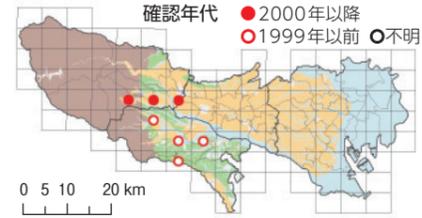
■ **種の特性と生息状況**：前腕長57～65mm、体重26～60g。北海道、本州、四国、九州などに分布する大型のコウモリである。ねぐらは大径木の樹洞を利用するが、近年人工物の利用も確認された。戦前は区部にも記録があるが絶滅したと考えられる。北多摩では確実な記録がない。現在は南多摩と西多摩に分布するが、ねぐら木は西多摩で数本確認されていたに過ぎず、いずれも伐採により消失した。近年、南多摩で確認されていた飛翔個体は、西多摩のねぐら木からの飛来であったことが確認されている。

■ **生存を脅かす要因**：各種開発、森林伐採、河川開発、観光開発等、市街地開発、ダム建設、不適切な環境管理、水質汚濁、シカの食害。何よりも大径木の樹洞が消失してしまうことの悪影響を受けているコウモリである。西多摩では現在も本種と思われるコウモリの飛翔を認めるが、ねぐら木の把握がまったく進んでいない。

■ **特記事項**：近年、社寺林・屋敷林の老齢化により、安全管理の観点から大径木の伐採や枝下ろしが相次いでいるが、本種のねぐら利用が認められる樹洞がある場合には、安全管理と樹洞の保全の両立を模索すべきである。また、大径木の腐朽部の治療として行われる樹洞の閉塞も本種のねぐらを消失させている可能性があり、本種への配慮を考える必要がある。

執筆 重昆達也

文献一覧 18, 22, 35, 44, 46, 50, 84, 90, 91, 104, 127



あきる野市 2000年

モリアブラコウモリ

Pipistrellus endoi

翼手目
ヒナコウモリ科

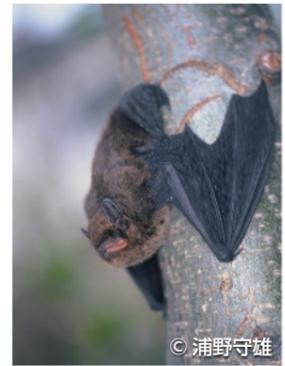
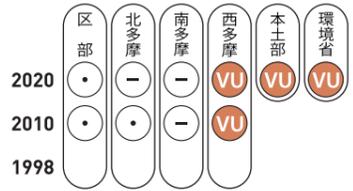
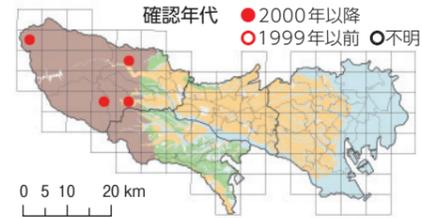
■ **種の特性と生息状況**：前腕長30～33mm。体重5～9g。本州、四国のほか最近九州での分布も確認された。日本固有種。標高1000m以上の比較的自然度の高い森林で捕獲されることが多い。ねぐらは樹洞や樹皮下の利用が見つかっている。都内でも東京都レッドリスト2020の現地調査により夏季に西多摩の亜高山帯に生息していることが確認されたが、春季には西多摩の多摩川沿いや秋川沿いの山麓部に現れることが確認されている。

■ **生存を脅かす要因**：各種開発、森林伐採、河川開発、観光開発等、市街地開発、ダム建設、不適切な環境管理、水質汚濁、シカの食害、局所分布。春季は採餌空間を河川に依存している可能性が高いことから河川環境の変化や汚濁、渓流周辺の樹林伐採には注意が必要である。

■ **特記事項**：出産哺育期には西多摩の亜高山帯だけでしか確認されておらず、この時期は局所分布になっている可能性がある。南多摩では本種のものとして示唆される音声記録されているが、種の同定には至っていない。山麓部でのねぐらはスギ・ヒノキ植林の樹皮下が利用されていることが明らかになっている。

執筆 重昆達也

文献一覧 19, 22, 36, 41, 49, 73, 86, 108



あきる野市 2000年

チチブコウモリ

Barbastella darjelingensis

翼手目
ヒナコウモリ科

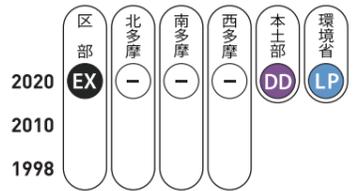
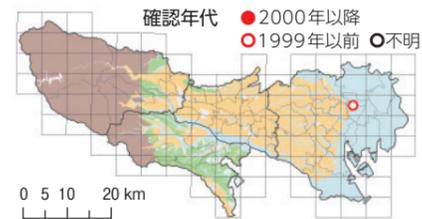
■ **種の特性と生息状況**：前腕長38～43mm。体重8～15g。北海道、本州の中部地方以北、四国の一部に分布する。ねぐらは樹洞と推測されているが、洞窟、隧道、枯木立の樹皮下の利用も知られている。都内では明治20年代に区部の道灌山（現在の荒川区西日暮里付近）で採集されたと伝えられる1個体が報告されているが、その後120年以上確認がない。現在も都内に生息する可能性があるのは西多摩の亜高山帯と予想される。

■ **生存を脅かす要因**：長期的な減少理由は不明。現在も西多摩に生息するのであれば、自然林の伐採はもとより、長期的なシカの食害による林相の変化も脅威となるだろう。しかし何よりも生息の可能性のある地域での調査が十分に行われていないことが問題点として挙げられる。

■ **特記事項**：東京都レッドリスト2020の現地調査で新たに2種のコウモリ類の生息が確認されたように、西多摩西部の山地～亜高山帯におけるコウモリ類相の把握は十分ではない。西多摩においてすでに絶滅しているのか判断ができない以上、本土部の評価は絶滅 (EX) ではなく、情報不足 (DD) とした。

執筆 重昆達也

文献一覧 50, 58, 73, 102



東京都外 2011年

ニホンウサギコウモリ

Plecotus sacrimontis

翼手目
ヒナコウモリ科

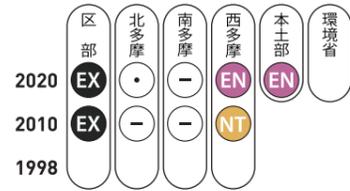
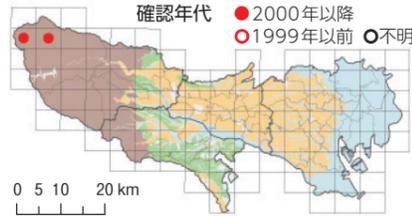
■ **種の特性と生息状況**：前腕長37～44mm、体重6～11g。北海道、本州の中部地方以北と紀伊半島、四国と九州の一部に分布する。日本固有種。ねぐらは洞窟や隧道のほか家屋や巣箱などの利用が知られている。都内では区部に戦前の記録があるが絶滅したと考えられる。現在は西多摩西部の鍾乳洞で少数が確認されているほか、雲取山の1900mのシラビソ帯でも捕獲された。西多摩の山地～亜高山帯に局所分布になっている可能性がある。

■ **生存を脅かす要因**：各種開発、森林伐採、石灰採掘、洞窟の消失や環境悪化、観光開発等、市街地開発、シカの食害、局所分布。自然林の伐採はもとより、長期的なシカの食害による林相の変化も脅威となるだろう。また、洞窟の閉塞や洞窟への人の立ち入りが悪影響を与えている可能性が考えられる。

■ **特記事項**：雲取山では授乳期直後のメス成獣が捕獲されており、都内でも出産哺育している可能性が高いが、これまで出産哺育洞も冬眠洞も見つかっていない。西多摩・本土部で絶滅危惧IB類(EN)と評価される以上、より正確な生息状況を把握するため、早急かつ継続した現況調査が必要である。

執筆者 重昆達也

文献一覧 38, 50, 73, 98, 105, 127



奥多摩町 2019年

ヒナコウモリ

Vespertilio sinensis

翼手目
ヒナコウモリ科

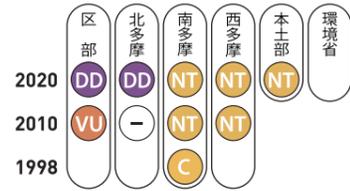
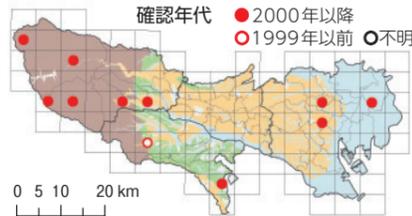
■ **種の特性と生息状況**：前腕長44～54mm、体重14～30g。北海道、本州、四国、九州に分布する。ねぐらは樹洞、洞窟、隧道などを利用するが、近年鉄道等の高架橋の隙間に集団を作ることが知られている。都内では近年、区部や南多摩の高層建築物などで移動途上と考えられる単独個体が見つかっている。西多摩では冬眠場所は見つかっているが、出産哺育場所は不明である。

■ **生存を脅かす要因**：各種開発、森林伐採、河川開発、観光開発等、市街地開発、ダム建設、不適切な環境管理、水質汚濁、シカの食害。自然林、人工林を問わず、森林伐採はねぐらを消失させる脅威となる。春季は採餌空間を河川に依存している可能性が高いことから河川環境の変化や汚濁には注意が必要である。

■ **特記事項**：区部は少数の単独個体しか見つかっていないことから情報不足(DD)とした。また、北多摩も狭山丘陵の埼玉県側に記録があることから情報不足(DD)とした。西多摩では当歳獣や授乳期直後のメス成獣が捕獲されているので出産哺育が行われているのは間違いないが、具体的な情報がない。

執筆者 重昆達也

文献一覧 22, 33, 34, 37, 38, 40, 46, 50, 91, 92, 106



檜原村 2006年

カグヤコウモリ

Myotis frater

翼手目
ヒナコウモリ科

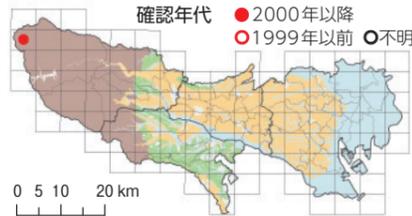
■ **種の特性と生息状況**：前腕長36～42mm、体重6～11g。北海道と本州の中部地方以北に分布する。通常のねぐらは樹洞と考えられるが、隧道、家屋、巣箱、橋梁などの利用も知られる。都内では西多摩の亜高山帯からのみ見つかっているが、哺育期直後の当歳獣も捕獲されたことからこの地域で出産哺育が行われている可能性が高い。都内では見つかったばかりであり、詳しい生息状況は不明である。

■ **生存を脅かす要因**：森林伐採、シカの食害、局所分布。自然林の伐採はもとより、長期的なシカの食害による林相の変化も脅威となるだろう。また、生息環境となる亜高山帯要素を持った森林は都内では面積が狭く、局所分布となっている可能性が高い。

■ **特記事項**：都内では東京都レッドリスト2020の現地調査において、2019年8月に雲取山の標高1800～1900mのシラビソ帯で4個体が初めて捕獲された。西多摩・本土部で絶滅危惧IB類(EN)と評価される以上、より正確な生息状況を把握するため、早急かつ継続した現況調査が必要である。

執筆者 重昆達也

文献一覧 72, 73, 111



奥多摩町 2019年

シナノホオヒゲコウモリ

Myotis hosonoi

翼手目
ヒナコウモリ科

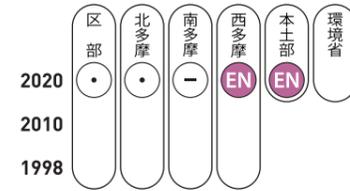
■ **種の特性と生息状況**：前腕長33～36mm、体重6～8g(いずれも東京都産5個体の計測値)。本州の中部地方に分布すると考えられる。本種を含めた5種または5亜種(ヒメ、エゾ、フジ、シナノ、オセホオヒゲコウモリ)を統合してヒメホオヒゲコウモリとする意見もある。ねぐらは樹洞や樹皮下と予想される。都内では西多摩の山地～亜高山帯から見つかっているが、当歳獣が捕獲されたので亜高山帯などで出産哺育している可能性が高い。

■ **生存を脅かす要因**：森林伐採、シカの食害、局所分布。自然林、人工林を問わず森林の伐採はねぐらを消失させる脅威となる。また、長期的なシカの食害による林相の変化も脅威となるだろう。これまで東京都水源林のような奥山だけしか見つかっておらず、局所分布の可能性が高い。

■ **特記事項**：都内では2016年6月に奥多摩町の標高670mで1個体が初めて捕獲され、その後4個体が奥多摩町の標高670～1900mで捕獲された。西多摩・本土部で絶滅危惧IB類(EN)と評価される以上、より正確な生息状況を把握するため、早急かつ継続した現況調査が必要である。

執筆者 重昆達也

文献一覧 3, 12, 13, 41, 45, 73, 112, 128



奥多摩町 2019年

モモジロコウモリ

Myotis macrodactylus

翼手目
ヒナコウモリ科

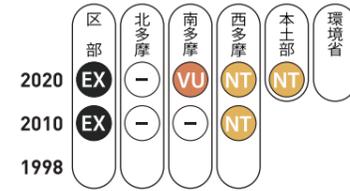
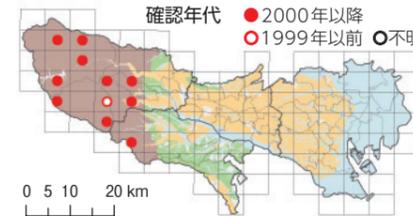
■ **種の特性と生息状況**：前腕長34～42mm、体重6～11g。北海道、本州、四国、九州やその周辺の島々に分布する。ねぐらは洞窟や隧道を利用する。森林内のほか、湖沼・河川の水面上で採餌することが多い。都内では区部に戦前の記録があるが絶滅したと考えられる。北多摩では確実な記録がない。現在は南多摩と西多摩の山地帯にのみ分布しているが、出産哺育洞や冬眠洞が見つかっているのは西多摩だけである。

■ **生存を脅かす要因**：各種開発、森林伐採、湖沼開発、河川開発、石灰採掘、洞窟の消失や環境悪化、観光開発等、市街地開発、ダム建設、水質汚濁、シカの食害。観光鍾乳洞の廃業等による洞窟の閉塞や洞窟への人の立ち入りが悪影響を与えている可能性が考えられる。

■ **特記事項**：南多摩と西多摩とも当歳獣が確認されているので出産哺育が行われているのは間違いないが、年間の活動サイクルの中でとりわけ重要な出産哺育洞や冬眠洞がどこにあるのかまだほとんど判っていない。また、出産哺育期と冬眠期の洞窟等への人の立ち入りに注意喚起することが望ましい。

執筆者 重昆達也

文献一覧 22, 35, 38, 41, 42, 50, 61, 73, 90, 91, 121



奥多摩町 2016年

ユビナガコウモリ

Miniopterus fuliginosus

翼手目
ヒナコウモリ科

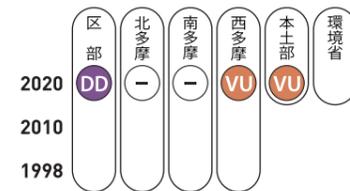
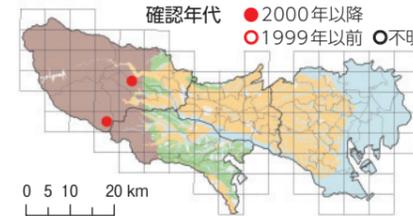
■ **種の特性と生息状況**：前腕長45～51mm、体重10～17g。本州、四国、九州とその周辺の島に分布する。ねぐらは洞窟や隧道であり、数百から数千頭の集団を形成する。行動圏は広く、季節的な移動が見られ、その移動距離は50～70km、まれに200km以上になる。都内では区部に戦前の記録がある。現在の確実な分布は西多摩の山地帯だけであるが、見つかったのは数個体に過ぎない。また、出産哺育洞も冬眠洞も見つかっていない。

■ **生存を脅かす要因**：各種開発、森林伐採、河川開発、石灰採掘、洞窟の消失や環境悪化、観光開発等、市街地開発、ダム建設、水質汚濁、シカの食害、局所分布。観光鍾乳洞の廃業等による洞窟の閉塞や洞窟への人の立ち入りが悪影響を与えている可能性が考えられる。

■ **特記事項**：戦前以来、長らく記録が途絶えていたが2015年に西多摩で単独個体が捕獲され、2019年には隧道内で小集団が見つかった。区部にはすでにねぐらはないが、本種の行動圏の広さから考えて地域的な絶滅を起こすとは考えにくい。過去に記録がある以上、区部の評価は情報不足(DD)とした。

執筆者 重昆達也

文献一覧 21, 23, 35, 50, 73, 85, 122



日の出町 2019年

テングコウモリ

Murina hilgendorfi

翼手目
ヒナコウモリ科

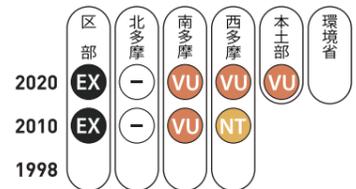
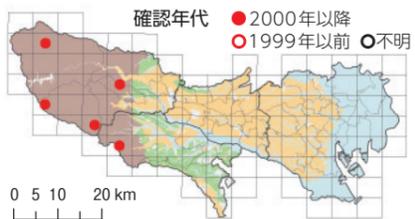
■ **種の特性と生息状況**：前腕長40～46mm、体重8～19g。北海道、本州、四国、九州などに分布する。ねぐらは洞穴、家屋、枯れて丸まった木の葉などを利用する。都内では区部に戦前の記録があるが絶滅したと考えられる。2004年に南多摩の高尾山で100年以上ぶりに再発見された。現在の分布は、南多摩と西多摩の山地帯に限られるが、これまで見つかったのはいずれも数個体に過ぎず、出産哺育洞も冬眠洞も見つっていない。

■ **生存を脅かす要因**：各種開発、森林伐採、石灰採掘、洞窟の消失や環境悪化、観光開発等、市街地開発、シカの食害。自然林の伐採はもとより、長期的なシカの食害による林相の変化も脅威となるだろう。また、洞窟の閉塞や洞窟への人の立ち入りが悪影響を与えている可能性が考えられる。

■ **特記事項**：近年では、南多摩で2個体、西多摩で数個体が見つっているに過ぎない希少なコウモリである。年間の活動サイクルの中でとりわけ重要な出産哺育洞や冬眠洞がどこにあるのかまだほとんど判っていない。また、出産哺育期と冬眠期の洞窟等への人の立ち入りに注意喚起することが望ましい。

執筆者 重昆達也

文献一覧 10, 31, 35, 38, 41, 50, 89, 109



八王子市 2016年

ニホンコテングコウモリ

Murina silvatica

翼手目
ヒナコウモリ科

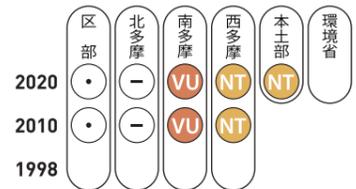
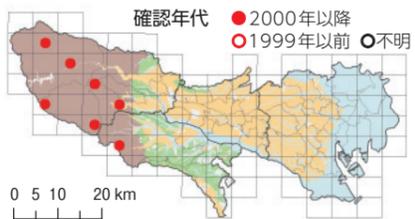
■ **種の特性と生息状況**：前腕長28～35mm、体重4～8g。北海道、本州、四国、九州とその周辺の島々に分布する。枯れ葉、樹皮下、樹洞、洞窟、隧道などさまざまな場所をねぐらに利用する。林内下層を飛翔するコウモリとされるが、出産哺育期のメス成獣は樹冠部をねぐらとして利用することが知られている。現在の分布は南多摩と西多摩の山地帯となっている。葉をねぐらにできることから、人工林であっても広範に生息が可能であると思われるが、都内での出産哺育場所や冬眠場所の情報は何もない。

■ **生存を脅かす要因**：各種開発、森林伐採、石灰採掘、洞窟の消失や環境悪化、観光開発等、市街地開発、シカの食害。自然林、人工林を問わず、森林伐採はねぐらを消失させる脅威となるほか、長期的なシカの食害による林相の変化も脅威となるだろう。洞窟の閉塞や洞窟への人の立ち入りが悪影響を与えている可能性が考えられる。

■ **特記事項**：南多摩と西多摩とも当歳獣や授乳期直後のメス成獣が確認されているので出産哺育が行われているのは間違いないが、年間の活動サイクルの中でとりわけ重要な出産哺育場所や冬眠場所がどこにあるのか一切判っていない。また、洞窟等への人の立ち入りに注意喚起することが望ましい。

執筆者 重昆達也

文献一覧 35, 41, 42, 82, 83, 91, 110



あきる野市 2016年

オオカミ

Canis lupus

食肉目
イヌ科

■ **種の特性と生息状況**：北および中央ヨーロッパから北アメリカにかけて広く分布し、日本では北海道、本州、四国、九州に分布した。北海道では19世紀に絶滅し、本州では1905年の奈良県での捕獲記録が最後である。頭胴長は本州産標本で950～1150mm、尾長は300mmである。シカを主に捕食していたと想像されるが、その生態は分かっていない。

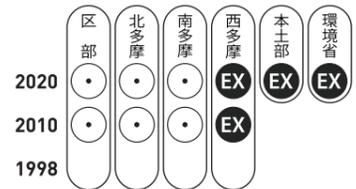
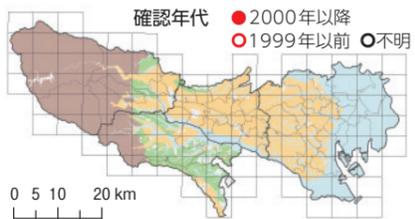
■ **生存を脅かす要因**：日本のオオカミが絶滅した理由は分かっていないが、長期的な生息環境の破壊や、特に明治以降の毒餌を用いた捕殺の影響が考えられている。

■ **特記事項**：東京都では、檜原村や日の出町において捕獲や収集された4個体のオオカミの骨（上顎骨、脊椎骨、頭蓋骨やその一部）が残っているが、明治時代までに絶滅したようである。

執筆者 山崎晃司

協力者 安藤元一

文献一覧 77, 101



アカギツネ

Vulpes vulpes

食肉目
イヌ科

■ **種の特性と生息状況**：北半球に広く分布し、日本では北海道、本州、四国、九州に分布して2亜種が知られる。ほっそりとした四肢と体つき、とがった鼻先、先端が白いふさふさとした尻尾が特徴である。耳も大きい。本州産の亜種は、オスで体重約5kg、メスで約4.5kgである。日和見的な雑食性で、哺乳類、鳥類、無脊椎動物、植物質など幅広く利用する。

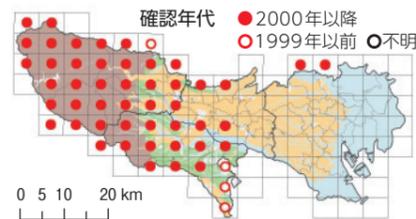
■ **生存を脅かす要因**：多摩地域では差し迫った脅威はないと考えられる。

■ **特記事項**：近年、区部の北区および荒川区の荒川流域や区部に隣接する北多摩地区狛江市の多摩川流域で再分布情報がある。それら地域での生息状況は今後の注意深いモニタリングが必要である。南多摩地区および西多摩地区の生息状況は安定していると考えられるが、同じイヌ科のタヌキに比べて生息密度は低い。

執筆者 山崎晃司

協力者 安藤元一

文献一覧 126



2009年

ツキノワグマ

Ursus thibetanus

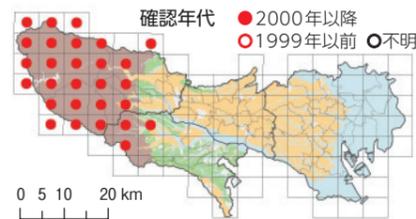
食肉目
クマ科

■ **種の特性と生息状況**：本州以南に分布するが、九州では地域絶滅、四国では剣山系に20頭程度が残るだけである。近年、本州では分布域を広げている。オス成獣で体重80～100kg程度、メス成獣で40～60kg程度である。胸部に三日月形の白い斑紋があるが、存在しない個体もある。大木の樹洞、根上がり穴、岩穴などで冬眠する。メスは冬眠中に出産を行う。植物質に偏った雑食性で、秋期に堅果を飽食して体脂肪を蓄える。

■ **生存を脅かす要因**：ツキノワグマの生息環境としての多摩地域の森林の質はこの数十年間安定しているが、シカによる下層植生への強い被食圧が、ツキノワグマの食物資源を減少させている可能性もある。

■ **特記事項**：近年分布域を東に拡大させており、青梅市や八王子市での情報も増えている。今後人との軋轢が増加する懸念もある。一方で、イノシシやシカの管理捕獲用の罠に錯誤捕獲される事例が今後増えることも予想され、状況の観察が必要である。

執筆者 山崎晃司 文献一覧 95



2006年

ニホンカワウソ

Lutra nippon

食肉目
イタチ科

■ **種の特性と生息状況**：北海道、本州、四国、九州、対馬に広く分布していたが、1980年代の高知県南西部での記録を最後に絶滅した。平たい頭部、小さな耳、短い肢、太くて円錐形の尾、指の間の水かきなどが特徴である。オス成獣で体重約6kg、メス成獣で約4kgという記録がある。魚類、甲殻類などを主食とする。

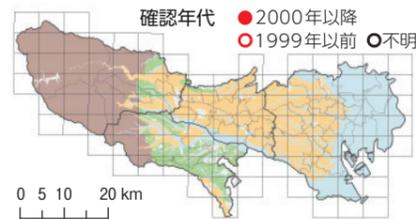
■ **生存を脅かす要因**：河川環境の改変や汚染、食物の減少、過剰な捕獲圧などが絶滅の要因として考えられるが、生態に関して現存する情報が少なく想像の域を出ない。

■ **特記事項**：1934年に発表された報文には、現在の台東区西部や北区南部などの区部にも生息したことが記されている。かつては河川中下流部から沿岸にかけて広く生息していたと思われるが、その後の絶滅に至る過程について不明である。

執筆者 山崎晃司

協力者 安藤元一

文献一覧 6, 50, 96, 124



ニホンテン

Martes melampus

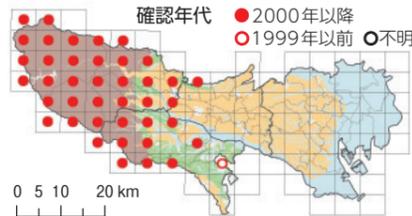
食肉目
イタチ科

■ **種の特性と生息状況**：日本の固有種で、本州、四国、九州、対馬に分布する。北海道南部には国内外来種として定着している。ほっそりとした体と長い尾を持つ。体色は夏毛では茶色を示すが、冬毛では明るい黄色に変化する。オスは体重約1,600g、メスは約1,000gで、オスの方が大きい。食性は果実、昆虫類、小型鳥類、げっ歯類などの小型哺乳類と幅広い。

■ **生存を脅かす要因**：多摩丘陵のような宅地開発が進んだ地域では、重要な生息環境である森林の縮小と断片化の影響が懸念される。また、道路交通事故に遭いやすいことが知られている。

■ **特記事項**：区部での戦前の記録があるが、絶滅したと考えられる。北多摩での生息状況は不明であるが、南多摩および西多摩での生息状況は安定していると考えられる。ただし、分布に関する情報は蓄積されていない。

執筆者 山崎晃司
文献一覧 77, 113



2009年

アナグマ

Meles anakuma

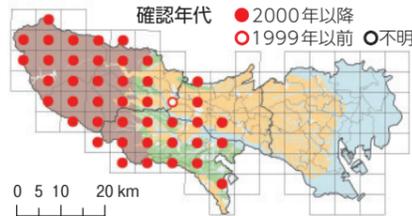
食肉目
イタチ科

■ **種の特性と生息状況**：日本の固有種で、本州、四国、九州に分布する。大型のイタチ科の種で、トンネル生活に適した小さな頭部とずんぐりとした体、短い尾、小さな目、土を掘るための鋭い爪を備えた強い前足を持つ。日の出町産の個体の平均体重は、オスで7.7kg、メスで5.4kgであった。食性は、春から夏はミミズ類を主食として、夏には果実や甲虫類も利用する。東京都郊外では、カキ果実が秋の重要な食品目である。

■ **生存を脅かす要因**：西多摩では特に大きな脅威は存在しないが、外来種であるアライグマとの種間競争については今後モニタリングが必要である。

■ **特記事項**：区部には戦前の記録があるが、絶滅したと考えられる。北多摩では状況の変化によって絶滅の恐れもあるが、南多摩および西多摩には安定的集団が存在すると考えられる。どの地域においても生息情報は蓄積されていない。

執筆者 山崎晃司 協力者 金子弥生
文献一覧 48, 50, 107



2009年

オコジョ

Mustela erminea

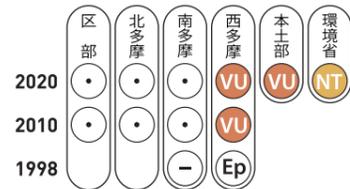
食肉目
イタチ科

■ **種の特性と生息状況**：北半球北部に広く分布し、日本には北海道と本州中部以北の山地帯とに2亜種が分布する。濃い褐色で腹部が白色の夏毛と、しっぽの先端が黒色であるほかは白色になる冬毛がある。オス（体重約200g）はメス（約160g）よりも大きい。食物は小型のげっ歯類、小型の鳥類、鳥類の卵、両生類、爬虫類、昆虫類やカタツムリなどである。

■ **生存を脅かす要因**：局所的に生息し、行動圏も数十ヘクタールとされるため、そうした生息環境の改変が大きな脅威となる。天敵はキツネや大型猛禽類とされるが、詳細は分かっていない。

■ **特記事項**：西多摩の多摩川北側地域に断片的な生息情報があるだけで、詳細な生息状況は分かっていない。西多摩でも、多摩川より南側（三頭山から御岳）の地域からは情報が得られていない。限られた地域に少数が生息しているものと想像できる。

執筆者 山崎晃司
協力者 小侯重信、岡島修、橋本敬和、浦野守雄、田畑伊織、松崎花
文献一覧 81, 114



ニホンイタチ

Mustela itatsi

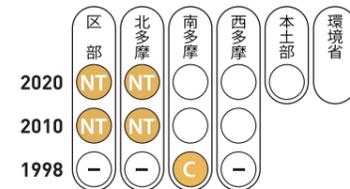
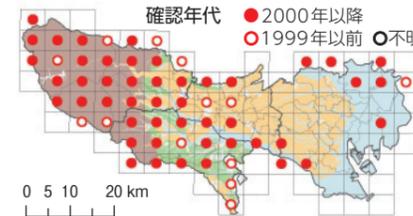
食肉目
イタチ科

■ **種の特性と生息状況**：日本の固有種で、本州、四国、九州の他、いくつかの島嶼にも分布する。東京都の八丈島などに分布するものは人の手による移入で国内外来種である。夏毛は濃い茶色であるが、冬毛は赤茶色に換毛する。目の周りの体毛は濃い。体重はオスで約450～500g、メスで150g程度と圧倒的にオスの方が大きい。雑食性で、げっ歯類、小型鳥類、魚類、甲殻類など節足動物、両生類、果実などの植物質も利用する。水辺を好む。

■ **生存を脅かす要因**：水辺を生息環境として選好するため、河川改修などは直接の脅威になる。

■ **特記事項**：区部および北多摩での生息状況は不明である。西多摩および南多摩では安定して生息していると思われるが、生息状況はほとんど調べられていない。

執筆者 山崎晃司
文献一覧 115



イノシシ

Sus scrofa

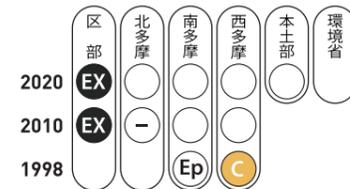
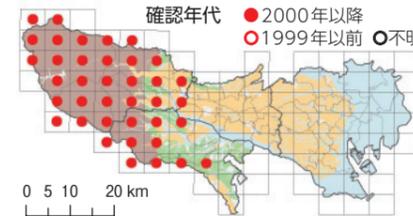
偶蹄目
イノシシ科

■ **種の特性と生息状況**：全身こげ茶色の剛毛、鼻先端は円盤状、尾は長く耳は小さい。成獣の体重は50～150kg、雄の方が大きく、雄の犬歯は牙となる。低山帯、里山の森林、疎林、耕作放棄地に生息。反芻胃をもたない雑食性で、植物の葉と茎、果実、堅果、根茎、ミミズ、カエルなどの小動物を食べる。3～6頭の多仔出産で、通常年1回春に出産。ユーラシアに広く分布、日本では本州、四国、九州、島嶼部に分布。都内では北多摩、南多摩、西多摩に生息する。近年、足立区で捕獲記録がある。

■ **生存を脅かす要因**：狩猟・捕獲。

■ **特記事項**：区部では、尾張家の鷹場（猟場）の一部であった小樽村（現練馬区）に江戸時代の生息記録がある（大石2000）。古林・笹田（2001）は江戸時代の東京近郊におけるイノシシ（とニホンジカ）の分布と生息状況を報告している。

執筆者 三浦慎悟
文献一覧 24, 87



2011年

ニホンカモシカ

Capricornis crispus

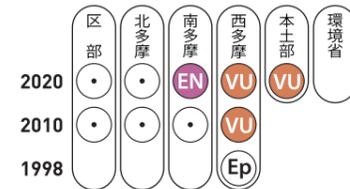
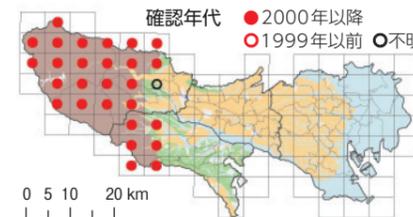
偶蹄目
ウシ科

■ **種の特性と生息状況**：体毛は白色、灰色、灰褐色、黒色など、個体変異が大きい。四肢は太くて短い。黒色の短い角がある。成獣の体重は30～45kg、性的二型はほぼない。低山帯から亜高山帯の森林、疎林に生息。広葉草本、ササ類を選択的に採食。出産期5～6月、交尾期10～11月。妊娠期間約215日、1産1仔。単独性で両性ともになわばりをもつ。本州、四国、九州に生息する日本固有種。都内では西多摩、南多摩に生息、北多摩と区部は低標高であるためにもともと生息していなかったと考えられる。

■ **生存を脅かす要因**：在来種（シカ）との競争があると考えられる。シカ柵のネットに絡まる事故、捕獲用のくくり罠による錯誤捕獲の可能性があり、影響が懸念される。

■ **特記事項**：東京都を含む関東山地のカモシカの生息状況は「関東山地カモシカ保護地域特別調査報告書」（平成28・29年度）に報告され、分布はやや拡大傾向にあるが、生息密度は前回調査（平成22年度）とほとんど変わらない。関東山地における生息メッシュ数は682で、生息密度を0.7頭/km²とすれば、推定頭数は約496頭となる。このうち東京都の生息メッシュ数は284で、同じ生息密度を仮定すると、約207頭となる。関東山地全体の個体群サイズは1000頭未満、250頭以上で、VUとなる。東京都集団はその1/2弱を構成する。

執筆者 三浦慎悟
文献一覧 54, 55, 66



東京都外 2021年

植物

藻類

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

昆虫類

甲殻類

クモ類

貝類

文献一覧

- 養場葉留果・岩淵真奈美・湊ちせ・樫村敦・湊秋作（2010）ニホンヤマネ *Glirulus japonicus* の活動期における休息場所としての朽ち木の利用. 環動昆, 21 : 255-257.
- あきる野市環境委員会自然環境調査部会 編（2013）V あきる野市の動物. あきる野市自然環境調査報告書（平成 21 年度～平成 23 年度）：83-141. あきる野市.
- 安井さち子・河合久仁子（2011）ヒメホオヒゲコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：44-45. 文一総合出版.
- 浅利裕伸（2012）東京・御岳山のムササビ観察地におけるニホンモモンガ. リスとムササビ, 28 : 7-8.
- 安藤元一（2005）樹上性齧歯類を対象とした巣箱調査法の検討. 哺乳類科学, 45（2）：165-176.
- 安藤元一（2008）ニホンカワウソ 絶滅に学ぶ保全生物学. 東京大学出版会：221pp.
- 安藤元一・倉持有希（2008）ムササビ *Petaurista leucogenys* の音声コミュニケーション. 東京農業大学集報, 53（2）：176-183.
- 井内岳史（1997）東京都* 矢沢林道 ニホンザル・カワネズミ. アニマルウォッチングの会 フィールドガイド 動物観察マップー関東版ー：72-75. 日経サイエンス社.
- 井口基（1991）東京のサル. どうぶつ社：138pp.
- 石田麻里・河合久仁子（2011）テングコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：58-59. 文一総合出版.
- 今泉古典（1949）分類と生態 日本哺乳動物図説. 洋々書房：348pp.
- 今泉古典（1958）日本産ホオヒゲコウモリ類について. 哺乳動物学雑誌, 1（5）：80-83.
- 今泉古典（1960）原色日本哺乳類図鑑. 保育社：196pp.
- 今泉古典（1961）ミズラモグラの新産地. 哺乳動物学雑誌, 2 : 16.
- 今泉古典・小原巖（1966）自然教育園内のモグラについて. 自然教育園の生物群集に関する調査報告 第1集：1-77. 野外自然博物館後援会：154pp.
- 今泉忠明（1969）ハタネズミの新産地. 哺乳動物学雑誌, 4 : 93.
- 今関真由美・吉田真也・安藤元一（2016）糞分布から見た孤立林地におけるムササビ *Petaurista leucogenys* の生息状況. 森林野生動物研究会誌, 41 : 19-26.
- 上原直樹（1981）資料哺乳類リスト. 理科教材開発委員会報告, 昭和 55 年度研究紀要：25-34. 八王子市教育委員会.
- 浦野守雄（1998）西多摩郡檜原村で確認されたモリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* について. 東京都の自然, 24 : 22.
- 浦野守雄. 私信.
- 浦野守雄・重昆達也（2014）東京都本土部におけるユビナガコウモリの参考記録. コウモリ通信, 21（1）：37-38.
- 浦野守雄・重昆達也・高水雄治（2002）東京都奥多摩地域のコウモリ類（1）あきる野市, 青梅市, 檜原村における採集記録. 東京都高尾自然科学博物館報告, 21 : 13-20.
- 浦野守雄ほか. 私信.
- 大石学（編著）（2000）多摩と江戸, 鷹場, 新田, 街道, 上水, たましん地域文化財団：339. けやき出版.
- 岡崎弘幸（1993）八王子市における哺乳動物の分布. 東京都の自然, 19 : 1-15.
- 岡崎弘幸（2003）多摩川流域におけるムササビの環境選択に関する研究（研究助成・一般研究, VOL.25-No.143）. 財とうききゅう環境浄化財団：34pp.
- 岡崎弘幸（2004）ムササビに会いたい. 晶文社：151pp.
- 岡崎弘幸（2012）ムササビとニホンモモンガが共存する神社（東京都編）. リスとムササビ, 28 : 9-11.

29. 岡崎弘幸・岡崎真幸（2014）9. 八王子のムササビ. 八王子市史編集委員会 編 新八王子市史 自然編：331-336. 八王子市.

30. 岡崎弘幸・今西誠・重昆達也（1996）東京都におけるムササビ *Petaurista leucogenys* の分布. 東京都高尾自然科学博物館研究報告, 17 : 1-24.

31. 小淵幸輝（2005）高尾山でテングコウモリの記録. コウモリ通信, 13（1）：7.

32. 重昆達也（2011）狭山丘陵の哺乳類. トトロのふるさと財団 編 自然環境調査報告書 第8集. 20-72. トトロのふるさと財団.

33. 重昆達也（2012a）関東地方の市街地で確認された単独のヒナコウモリ. コウモリ通信, 19（1）：9-10.

34. 重昆達也（2012b ）東京都足立区で見つかったヒナコウモリと考えられる保護記録. コウモリ通信, 19（1）：20-21

35. 重昆達也（2019）意外と多様な東京都（本土部）のコウモリ類. 森林野生動物研究会誌, 44 : 45-49.

36. 重昆達也・浦野守雄・安藤陽子・高水雄治（2006a）東京都奥多摩山地におけるモリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* の春季ねぐら（day roost）について. ANIMETE, 6 : 19-26.

37. 重昆達也・浦野守雄・安藤陽子・高水雄治（2006b）東京都奥多摩地域におけるヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の春季 ねぐら（day roost）について. Animate, 6 : 27-32.

38. 重昆達也・浦野守雄・高水雄治（2014）東京都西多摩郡奥多摩町におけるコウモリ類の採集記録. ANIMATE, 11 : 36-41.

39. 重昆達也・御手洗望・金田正人・山崎文晶・森崎将輝・津田朋香・小野晋・繁田祐輔・繁田真由美・草出諒・田村典子（2014）埼玉県入間市で野生化しているクリハラリスの初期防除の試み. 埼玉県自然の博物館研究報告, 8 : 19-32.

40. 重昆達也・大沢夕志・大沢啓子・峰下 耕・清水孝頼・向山 満（2013）群馬県の新幹線高架橋で見つかったヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の出産哺育コロニーおよび冬季集団. 群馬県立自然史博物館研究報告, 17 : 131-146.

41. 重昆達也・峰下耕・浦野守雄・佐藤顕義・杉山俊和・松山 龍太・大沢夕志・大沢啓子・小西悦子・山崎文晶・小松茉莉奈・水野昌彦・野口郊美・前迫大也・石坂真悟・坂田大輔・荒木ひとみ・白井郁（2018）「環境省レッドデータブック 2014」の絶滅危惧Ⅱ類モリアブラコウモリは多摩川流域に いつ、どこに棲んでいるのか？（研究助成・一般研究, VOL. 40-No.237）.（公財）とうききゅう環境財団：36pp.

42. 重昆達也・峰下耕・浦野守雄・手塚牧人・杉山俊和・松山龍太・長谷川紗羅・吉場聖菜・小西悦子（2016）多摩川流域（東京都域）におけるハープトラップを導入した森林性コウモリ類相の把握に関する調査研究と音声ライブラリー構築の試み（研究助成・一般研究, VOL. 38-No.224）.（公財）とうききゅう環境財団:17pp.

43. 重昆達也ほか. 未発表.

44. 重昆達也ほか. 未発表.

45. 重昆達也ほか. 未発表.

46. 金井郁夫（1971）八王子のけもの（八王子の動物・第2報）. 八王子市教育委員会：17pp.

47. 金井郁夫（1988）高尾山の自然. 日本の生物, 2（9）：45-50.

48. 金子弥生（2016）多摩の里山に生きるアナグマ. 緑と水の広場, 85 : 16-17.

49. 河合久仁子（2011）モリアブラコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：35. 文一総合出版.

50. 岸田久吉（1934）大東京の哺乳動物に就いて. Lansania, 6（52）：17-30.

51. 清水海渡・松山龍太（2014）神奈川県における約 50 年ぶりとなるキクガシラコウモリの確認. 神奈川自然誌資料, 35 : 49-50.

52. 清水海渡・松山龍太. 私信.

53. 清水善吉（1988）東京都雲取山における小型哺乳類の分布および繁殖習性. 東京都高尾自然科学博物館研究報告, 13 : 11-16.

54. 群馬県・埼玉県・東京都・山梨県・長野県教育委員会（2010）関東山地カモシカ保護区地域特別調査報告書平成 20・21 年度. 群馬県・埼玉県・東京都・山梨県・長野県教育委員会：152pp.

55. 群馬県・埼玉県・東京都・山梨県・長野県教育委員会（2018）関東山地カモシカ保護区地域特別調査報告書平成 28・29 年度. 群馬県・埼玉県・東京都・山梨県・長野県教育委員会：91pp.

56. 小林毅（1997）東京都* 山のふるさと村 ニホンリス・キツネ・タヌキ・ヒメネズミ. アニマルウォッチングの会 フィールドガイド 動物観察マップー関東版ー：18-21. 日経サイエンス社.

57. 小林毅（1997）東京都* 山小峰ビジターセンター カヤネズミ・モリアオガエル. アニマルウォッチングの会 フィールドガイド 動物観察マップー関東版ー：26-29. 日経サイエンス社.

58. 近藤憲久（2011）チチブコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：39. 文一総合出版.

59. 佐野 明（2011）キクガシラコウモリ. コウモリの会編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：18-19. 文一総合出版.

60. 佐野明（2011）コキクガシラコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：20-21. 文一総合出版.

61. 佐野明（2011）モモジロコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：48-49. 文一総合出版.

62. 繁田真由美（2014）5. ヤマネとリスの仲間. 八王子市史編集委員会 編 新八王子市史 自然編：314-316. 八王子市.

63. 繁田真由美・荘司たか志・重昆達也・安藤元一（2009）東京都町田市におけるムササビ孤立個体群の生息環境. 森林野生動物研究会誌, 34 : 37-43.

64. 島田将喜・関口和世・藤原詩織・森貴久（2018）東京都奥多摩町サイグチ沢におけるカワネズミの生息確認. 帝京科学大学紀要, 14 : 17-24

65. 鈴木圭・小川博・天野卓・安藤元一（2008）丹沢山地の巣箱利用からみたニホンモモンガ *Pteromys momonga* の環境嗜好. 東京農業大学農学集報, 53（1）：13-18.

66. 生物多様性センター（2019）平成 30 年度（2018 年度）中大型哺乳類分布調査法報告書. 環境省：116pp.

67. 立石隆（1999）秩父山地雲取山の小哺乳類相. 哺乳類科学, 39 : 289-297.

68. 田村典子（2000）都市近郊における森林の断片化とリスの生息分布. 森林防疫, 49 : 2-6.

69. 田村典子（2010）松枯れがニホンリスの生息に与える影響. 森林防疫, 59 : 3-9.

70. 田村典子（2011）リスの生態学. 東京大学出版会：211pp.

71. 田村典子・岡野美佐夫・星野莉紗（2017）狭山丘陵に生息する特定外来生物キタリスの早期対策の試み. 哺乳類科学, 57 : 367-377.

72. 出羽寛（2011）カグヤコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：43. 文一総合出版.

73. 東京都レッドリスト改訂哺乳類専門家会. 未発表.

74. 東京都産業労働局（2016）平成 27 年度ニホンザル生息状況調査委託調査報告書.

75. 東京都立八王子高陵高等学校生物部（1996）東京都多摩西部・南部における野生動物分布調査Ⅱ. 東京都立八王子高陵高等学校：32pp.

76. 鳥居春己（2010）静岡県におけるニホンノウサギの繁殖特性. 奈良教育大学紀要, 59（2）：15-19.

77. 直良信夫（1965）日本産狼の研究：158-188. 校倉書房.

78. 中島福男（2001）日本のヤマネ. 信濃毎日新聞社：169pp.

79. 那波昭義（1961）東京都城北荒川河畔の小哺乳類について. 哺乳動物学雑誌, 2 : 23-28.

80. 日本生態系協会 編（2009）ニホンリス *Sciurus lis* の HSI モデル ver.2.0. ハビタット評価モデルシリーズ 1. 日本生態系協会：16pp.

81. 野紫木洋（1995）オコジョの不思議. どうぶつ社.

82. 平川浩文（2007）コテングコウモリ（*Murina ussuriensis*）の夏季におけるねぐら利用. 東洋蝙蝠研究所紀要, 6 : 1-7.

83. 平川浩文（2011）コテングコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：60-61. 文一総合出版.

84. 福井大（2011）ヤマコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：30-31. 文一総合出版, 東京.

85. 船越公威（2011）ユビナガコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：54-55. 文一総合出版.

86. 船越公威・前田史和・奥谷公亮・江壽真南（2022）九州で初めて発見されたモリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* の同定, 頭骨の特徴および mtDNA 解析に基づく系統的位置づけ. 哺乳類科学 ,62（2）：239-245.

87. 古林賢恒・筱田寧子（2001）江戸近郊におけるニホンジカ（*Cervus nippon*）の生息状況. 野生生物保護, Vol 7（1）：1-24. 野生動物保護学会.

88. 町田和彦（2018）（1）哺乳類. 埼玉県環境部みどり自然課 編 埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第4版）：64-71. https://www.pref.saitama.lg.jp/b0508/saitamakennoyseiteibutu/reddatebook2018.html 2019 年 12 月 5 日最終更新, 2021 年 11 月 24 日参照.

89. 松山龍太・清水海渡・大沢進・浦野守雄（2022）東京都松原都民の森とその周辺域で確認された哺乳類目録. ANIMATE, 17 : 21-34.

90. 三笠暁子（1998）哺乳類 東村山市のコウモリ類. 東村山市史編さん委員会 編 東村山市史 3 資料編自然：372-380.

91. 峰下耕・繁田真由美（2014）7. コウモリの仲間. 八王子市史編集委員会 編 新八王子市史 自然編：323-329. 八王子市.

92. 向山満（2011）ヒナコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：32-33. 文一総合出版.

93. 矢光啓志・橋本善太郎・松尾友矩（2008）南多摩地域の丘陵地におけるムササビの分布情報解析. 野生生物保護, 11（2）：11-18.

94. 矢部辰男（1966）自然教育園におけるネズミ類について. 自然教育園の生物群集に関する調査報告 第1集：68-71. 野外自然博物館後援会.

95. 山崎晃司（2019）東京のツキノワグマの保全とこれから. 森林野生動物研究誌, 第4 : 51-55. 森林野生動物研究会.

96. 山本佳代子・安藤元一・小川博・秋篠宮文仁・奥野卓司（2016）明治から平成の新聞記事に見るニホンカワウソに関する記事内容の変化. BIOSTORY, 23 : 96-106.

97. 山本輝正（2011）クビワコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：26-27. 文一総合出版, 東京.

98. 吉倉智子（2011）ニホンウサギコウモリ. コウモリの会 編 コウモリ識別ハンドブック改訂版：40-41. 文一総合出版.

99. 吉田真也・安藤元一・繁田真由美・荘司たか志・小川博（2011）ラインセンサス調査と出巢率調査によるムササビ *Petaurista leucogenys* の生息密度推定. 森林野生動物研究会誌, 36 : 25-30.

100. 吉行瑞子（1996）地下生活のモグラ（1）―東京 23 区内から消え行くアズマモグラ―. ゆとりある大地, 374 : 16-17.

101. Endo, H. (2018) *Canis lupus*. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 226-227. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.

102. Fukui, D. (2015) *Barbastella darjelingensis* (Hodgson, 1855). In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 88-89. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.

103. Fukui, D. (2015) *Eptesicus japonensis* Imaizumi, 1953. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 72-73. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.

植物

藻類

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

昆虫類

甲殻類

クモ類

貝類

植物

藻類

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

淡水魚類

昆虫類

甲殻類

クモ類

貝類

104. Fukui, D. (2015) *Nyctalus aviator* Thomas, 1911. In Ohdachi S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 76-78. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
105. Fukui, D. (2015) *Plecotus sacrimontis* G. M. Allen, 1908. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 90-91. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
106. Fukui, D. (2015) *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880). In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 96-98. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
107. Kaneko, Y. (2015) *Meles anakuma*. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 266-268. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
108. Kawai, K. (2015) *Pipistrellus endoi* Imaizumi, 1959. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 85-86. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
109. Kawai, K. (2015) *Murina hilgendorfi* (Peters, 1880). In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 117-119. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
110. Kawai, K. (2015) *Murina ussuriensis* Ognev, 1913. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 123-125. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
111. Kawai, K. (2015) *Myotis frater* Allen, 1923. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 100-101. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
112. Kawai, K. (2015) *Myotis ikonnikovi* Ognev, 1912. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 104-106. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
113. Masuda, R. (2015) *Martes melampus*. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 258-259. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
114. Masuda, R. (2015) *Mustela erminea*. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 254-255. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
115. Masuda, R., Watanabe S. (2015) *Mustela itatsi*. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 248-249. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
116. Ohdachi, S.D., Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh. (eds) (2015) The Wild Mammals of Japan. Second edition: 506pp. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
117. Oshida, T. (2015) *Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827) In Ohdachi S.D., Ishibashi, Y., Iwasa M.A., Fukui D. & Saitoh T. (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 200-201. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
118. Oshida, T. (2015) *Pteromys momonga* Temminck, 1844. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 202-203. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
119. Saito M. and Koike F (2009) The importance of past and present landscape for Japanese hares *Lepus brachyurus* along a rural-urban gradient. Acta Theriologica, 54: 363-370.
120. Sano, A. & Armstrong, K. N. (2015) *Rhinolophus cornutus* Temminck, 1834. In Ohdachi S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 61-62. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
121. Sano, A. & Ishida M. (2015) *Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840). In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 107-109. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
122. Sano, A. (2015) *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835). In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 126-127. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
123. Sano, A. (2015) *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774). In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 58-60. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
124. Sasaki, H. (2015) *Lutra lutra*. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 262-263. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
125. Tamura, N. (2015) *Sciurus lis* Temminck, 1844. In Ohdachi S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 192-194.
126. Uraguchi, K. (2015) *Vulpes vulpes*. In Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds), The Wild Mammals of Japan Second Edition: 222-223. SHOUKADOH Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan.
127. Yoshiyuki, M. & Endo, H. (2003) Catalogue of Chiropteran Specimens in Spirit. National Science Museum: 153pp.
128. Yoshiyuki, M. (1989) A systematic study of the Japanese Chiroptera. National Science Museum monographs, 7: 1-242.

写真提供者一覧 (哺乳類)

安藤元一、岩佐真宏、植田好洋、浦島淳吉、浦野守雄、大沢夕志、岡崎弘幸、重昆達也、国立科学博物館、田畑伊織、土屋公幸、三浦慎悟、水内誠